



Title	巡礼ツーリズムの経験価値 : 西国三十三所および四国八十八ヶ所巡礼を事例として[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	南地, 伸昭
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第15168号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87303
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Nobuaki_Nanchi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：南 地 伸 昭

学位論文題名

巡礼ツーリズムの経験価値

—西国三十三所および四国八十八ヶ所巡礼を事例として—

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、成熟化社会における新たな観光形態の一つである「巡礼ツーリズム」が有する「経験価値」の体系と特徴を明らかにすることである。とりわけ、経済システムが、農業経済から産業経済、サービス経済、さらには経験経済へと変化するのに伴い、提供物としての経済価値がコモディティから製品、サービス、経験へと展開し、主体の経験を動機とする経済が拡大していることに鑑み、消費者行動研究の分野で発展してきた「経験価値モデル」の理論的枠組みを用いて、日本を代表する巡礼である西国三十三所および四国八十八ヶ所巡礼ツーリズムの特徴を捉え直したうえで、質問紙調査に基づくモデル実証を行うことにより、現代の巡礼者が巡礼ツーリズムに見出す経験価値を明らかにする。

2. 研究の視座と方法

本研究では、主体としての消費者が何を体験したかが価値を有する経験経済システムへの移行に伴い消費者行動の研究分野で発展してきた「経験価値モデル」が提示した経験価値の価値次元の観点から巡礼ツーリズムの特徴を捉え直すことにより、巡礼ツーリズムが有する経験価値の実態を明らかにすることを試みた。

最初に、巡礼およびツーリズムに関する先行研究のサーベイを行い、それぞれの特徴を浮き彫りにした。古来、聖地への巡礼者は、宗教的な信仰はもとより、見聞や娯楽、芸術などの多様な目的をもって旅に出かけてきたのであり、旅も、宗教的行為である巡礼も、ともに人間の主観的な経験としての「真正性の探求」を基底にしていることを明らかにした（第2章）。

次に、祈りを中心とする宗教的行為であった巡礼と、経済財としてのツーリズムが融合しながら市場経済システムに包含され、巡礼ツーリズムが誕生した背景について考察した。すなわち、宗教の私事化と宗教資源の脱埋め込み化および社会の個人化と個人のスピリチュアル化、情報通信技術の発展や経験経済への移行に伴う経験価値の重要性の高まりを背景として、ツーリズム産業によって経済財としての巡礼ツーリズムがプロデュ

ースされるようになったことを明らかにした。そのうえで、日本を代表する主な巡礼ツーリズムが有する多彩な魅力について提示した（第3章）。

消費が自己アイデンティティの確立手段として用いられるようになったことから、主体としての消費者が消費行動の過程で何を見聞きし感じたかといった経験の内容そのものが重要な価値を有するようになった。現代の巡礼者が巡礼ツーリズムを通じて楽しみ、学び、感動しつつ自分探しをする過程は経験消費の典型であるといえよう。そこで、経験経済システムの進化に伴い消費者行動の研究分野で発展してきた「経験価値モデル」が提示した経験価値の価値次元の観点から、巡礼およびツーリズムのそれぞれの特徴を捉え直しながら考察することにより、現代の巡礼者が巡礼ツーリズムに見出している多様な経験価値の構成要素、すなわち価値次元を浮き彫りにした（第4章）。

また、巡礼ツーリズムが有する経験価値の構成要素を捕捉するための測定項目を仮説的に提示し、それらの項目から構成される質問紙による調査を西国三十三所巡礼バスツアーの参加者に対して行った。そのうえで、得られた回答に基づき巡礼ツーリズムの経験価値に関する構成概念の提示と測定尺度モデルの構築を行い、当該モデルの有用性を実証することにより、西国巡礼ツーリズムが有する経験価値の構成要素を浮き彫りにした（第5章）。さらに、西国三十三所巡礼と並んで日本を代表する巡礼であり、「お接待」文化を特徴とする四国八十八ヶ所巡礼バスツアーを取り上げて前章と同様の手順を踏みながらモデル実証を行い、巡礼ツアー参加者が四国遍路に見出している「訪れるに値するもの」を浮き彫りにした（第6章）。

3. 得られた新たな知見

最初に、巡礼ツーリズムが有する多様な魅力を、「経験価値モデル」が提示した経験価値の価値次元の観点から捉え直しながら考察することにより、巡礼ツーリズムが有する経験価値に関する構成概念を提示した。現代の巡礼者は、①寺社建築や鐘の音、仏像などの視聴覚的な美しさ、礼拝の厳かな雰囲気などに見出す「審美的価値」、②巡礼路の自然の景観や景勝地の観光などを楽しむ「娯楽的価値」、③非日常的でオーセンティックなものを探し求めて聖なる時空に移行する経験に見出す「脱日常的価値」、④偉大な聖人の足跡にふれることで学んで知的好奇心を満たす「教育的価値」、⑤単なる一時的な遊興ではなく、人間の主観的な経験としての真正性の探求に見出す「真正性の価値」、⑥数珠や御朱印などの物質的なアイテムおよび霊場の空間が醸し出す雰囲気、巡拝用の白衣や傘を身に着ける行為に「聖なるもの」を見出し評価する「神聖性の価値」、⑦他の巡礼者や地域住民との交流を通じて仲間意識などの共同性を回復することに見出す「社会的価値」、⑧地域住民によるお接待や、先達による引率・指導などの見返りを求めない無私の行為に見出す「利他的価値」、⑨巡礼の旅で添乗員や先達などから享受したサービスが優れていると評価する場合に見出す「優れたサービス」、⑩巡礼の旅がそれに費やした時間や金銭に見合った実り多いものであると評価する場合に見出す「コストパフォーマンス」といった多様な経験価値の価値次元を見出していることが明らかになった。

次に、西国三十三所巡礼の日帰りバスツアー参加者への質問紙調査および経験価値の構成概念の尺度化を行った結果、参加者が「脱日常的価値」および「真正性の価値」、「審美的および娯楽的価値」、「教育的価値」、「経済的価値」、「社会的価値」の経験価値の価値次元を、巡礼ツアーに見出していることを、また四国八十八ヶ所巡礼バスツアー参加者への質問紙調査および経験価値の構成概念の尺度化を行った結果、参加者が「神聖性の価値」および「社会的価値」、「経済的価値」、「真正性の価値」、「脱日常的価値」、「教育的価値」の経験価値の価値次元を、巡礼ツアーに見出していることが確認された。

このように、「経験価値モデル」の理論的枠組みを用いて巡礼ツーリズムの特徴を捉え直しつつ考察するといった新たな分析手続きを提示したこと、また、質問紙調査を用いたモデル実証を行うことにより、西国巡礼と四国巡礼の間にはそれらが有する経験価値に違いがあり、日本の代表的な巡礼ツーリズムの経験価値の多様性とその基本構造を提示したことが、本研究の学術的貢献である。